

## Ⅱ．研修別報告

### 6．岐阜県における End-of-Life Care 充実 に向けた研修会

# 岐阜県における End-of-Life Care 充実に向けた研修会

キーワード： End-of-Life Care 人材育成 フォローアップ研修

## I. はじめに

がん及び慢性疾患患者の増大や高齢化社会の到来に伴い、End-of-Life Care（以下 EOL Care と略す）の充実が求められており、EOL Care に携わる看護職者の教育の強化が喫緊の課題となっている。このような社会状況を背景に、「すべての人々へ質の高い EOL Care を届ける」をミッションに掲げた ELNEC-J（The End-of-Life Nursing Education Consortium Japan）の活動が推進されてきている。わが国では、日本緩和医療学会が中心となってこの活動を推進している。ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラムは 10 のモジュールで構成され、2 日間で実施する内容となっている。岐阜県においても、岐阜県がん看護専門看護師コンサルタント事業として平成 26 年 8 月～平成 28 年 2 月に 6 回の研修会が実施されるなど、EOL Care に関する教育の裾野は広がりつつある。

一方、平成 28 年度に筆者らが ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象として実施した調査結果から、看護職は EOL Care を実践する上で様々な困難や課題を抱えており、日々の実践の振り返りやプログラムの学びを基盤に EOL Care に必要な知識・技術を強化する機会を望んでいることが明らかになった。この結果より、平成 29 年度は共同研究事業として、平成 30 年度は看護実践研究指導事業として県内のがん看護専門看護師と協働し、ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象としたフォローアップ研修を開催し、参加者より好評を得、同研修の継続の必要性を確認している。

そこで、今年度は昨年度実施したフォローアッププログラムに改善を加え、看護実践研究指導事業として研修会を実施し、岐阜県における EOL Care の充実を図る。

## II. 事業担当者

成熟期看護学領域：奥村美奈子、布施恵子、宇佐美利佳、鳴海叔子

## III. ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象としたフォローアップ研修会準備

### 1. 研修内容の検討

#### 1) フォローアップ研修会講師

岐阜県内で活動しているがん看護専門看護師で、ELNEC-J 指導者養成プログラムを修了しトレーナーとして活動している 6 名に依頼をした。

＜講師メンバーと所属＞

荻谷三月（岐阜大学医学部附属病院）

澤井美穂・住田俊彦（東海中央病院）

田上知江美（岐阜北厚生病院）

林ひとみ（大垣市民病院）

葛谷命（岐阜市民病院）

#### 2) 研修会内容の検討方法

研修会の詳細について、令和元年 10 月 28 日（月）15 時～17 時に本学演習室 104 において、研修会講師であるがん看護専門看護師と教員で検討を行った。まず、昨年の研修会の評価を共有し、本研修会の参加者は ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者であり、EOL Care に対する意識が高いことを確認した。一方、日頃の看護活動を通して、全般的に看護師のアセスメント力が弱く、カンファレンスでケア対象者のゴールを考えることが難しいといった状況が共有された。このような背景には、看護実践現場の多忙さから看護師が時間に追われ、患者・家族の思いを聴く姿勢が低下しており、その結果、看護師のやりがいも低下しているといった意見が交わされた。そこで、本年度の目標をアセスメント力の強化とし、参加者自身が大切にしている看護を考え、研修会での学びや気づきを実践に活かしていけるような内容にするの方針を確認し、研修会の副題を「明日から頑張れる！実践に活かせる！」とした。

研修会の具体的な方法は、アセスメントに関する思考を確認するための講義と事例を用いたグループワークの 2 部構成で、講義は ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラムのフォローアップ研修会であることを念頭に、アセスメントについて ELNEC-J のモジュールを確認しながら解説することにした。また、グループワークについては、今年度新たな試みとしてワールドカフェ方式を取り入れ、参加者ができるだけ多くの人と意見交換し、気づきや学びの機会が得られるように工夫した。具体的には、所属施設の役割・機能が共通する参加者でグループを作り、アセスメントについて初回のワーク

を行う。その後、グループメンバーの中から 2 名のホストを決め、ホスト以外のメンバーは複数回移動しながら他のグループで意見交換を行い、ホストは自分のグループの検討内容を他のグループメンバーに説明し、意見交換を行う。最後に、全員が当初のグループに戻って看護目標・プランまでを検討するという方法にした。また、グループワークの討議内容を可視化し共有できるようホワイトボードを使用し、さらに今回の学びを今後の実践に活かせるようホワイトボードの記録を印刷して参加者に配布することにした。加えて、昨年の評価でグループワークの時間が短かったとの意見があったことや、今回の目的であるアセスメント力の強化を図るには十分な時間が必要であるとの観点から、講義は 20 分、グループワークを 150 分（休憩 10 分、全体共有 20 分を含む）に設定した。研修会の募集者数は例年と同様の 50 名とし、今後の研修会に向けた準備の担当者を決定し、以後は必要時メール等で共有することを確認した。

## 2. 参加者の募集

募集者数は 50 名で、応募要件は「ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム」受講修了者（受講時期や施設、実施主体は問わない）とした。

研修会参加者の募集については、対象施設を県内の病院（100 施設）、訪問看護ステーション（88 事業所）、特別養護老人ホーム（169 施設）、介護老人保健施設（76 施設）に対して、令和元年 11 月上旬に看護管理者又は施設長宛に案内状と研修会のチラシを送付し、同時に大学ホームページに研修会開催の案内を掲載した。

## IV. ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム受講者を対象としたフォローアップ研修会開催

### 1. 研修会開催日時・場所

日時：令和 2 年 1 月 11 日（土）13：00～16：00

場所：岐阜県立看護大学 講義室 203

### 2. プログラム

13：00～13：05：開会あいさつ

13：05～13：25：講義 End-of-Life Care のアセスメントを考える

13：25～15：35：グループワーク（10 分間の休憩含む）

①事例紹介 ②グループワークの進め方について説明 ③グループワーク（ワールドカフェ方式）

15：35～15：55：全体共有

15：55～16：00：閉会のあいさつ、アンケートの記入

### 3. 研修会の実際

#### 1) 参加者の状況

研修会への参加者は 25 名で、所属は医療機関 15 名、訪問看護ステーション 5 名、特別養護老人ホームが 4 名であった。また、所属施設数は医療機関 8 施設、訪問看護ステーション 2 事業所、特別養護老人ホームが 4 施設であった。また、参加者 25 名中 4 名は ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム未受講者であったが、事前の問い合わせで受講予定が確定していること等が確認できたため、研修会受講を許可した。修了証は 21 名（ELNEC-J 未受講者 4 名を除く）に発行した。

#### 2) プログラムの実際

##### (1) グループの設定

参加者 24 名を所属施設の特徴をもとに、訪問看護ステーション 1 グループ、特別養護老人ホーム 1 グループ、医療機関 3 グループの合計 5 グループに分け、1 グループ 5 名であった。

##### (2) 研修会の内容

講義は、東海中央病院の澤井美穂氏と住田俊彦氏が担当し、「End-of-Life Care のアセスメントを考える」と題して 20 分間の講義を行った。その内容は、看護の目的の確認から始まり、なぜ思考過程が踏めないのか、看護過程や看護の視点の確認、アセスメントの意味と実践するためのステップについて説明し、その後「死期が近づいた時期の栄養管理」について考える事例を ELNEC-J のモジュール 8 を参考に解説した。

グループワークは、葛谷命氏より「在宅で過ごす高齢者の意思を支えるためのケア」をテーマに、90 代女性で脳梗塞後遺症と心不全が認められる事例の紹介があった。参加者全員で事例を共有した後、田上知江美氏の司会・進行により、グループごとに 1 名の講師がファシリテータとなってワークを進めた。まず、当初のグループで事例のアセスメントを行い、その後ホスト 2 名以外が他のグループに出かけてディスカッションを行う機会を 3 回設け、事例のアセスメントを深めた。最後に、全員が当初のグループに戻り、アセスメントに基づいた看護目標を検討した。グループワーク中は音楽を流し、

参加者がリラックスして自由に活発な討議ができるよう工夫した。グループワークの後、林ひとみ氏の司会で OHC を用いながら 20 分間全体共有を行った。

## **V. 研修会修了後の評価**

### **1. 講師と教員による評価**

研修会修了後、講師と教員で 30 分程度の振り返りを行った。グループワークの様子について、具体的なケアに関する発言はあるがケアの根拠が不明確、身体面のアセスメントが深まらない、アセスメントとケアが繋がっていない、アセスメントから看護目標を導き出すことが難しいなどが共有された。

一方、グループワークの経過の中で、参加者自身がアセスメントの重要性を再確認し、自身の思考の特徴や日頃の実践で不足している視点についても気づいていたことが確認できており、研修会の目標は概ね達成できたと評価した。事例については、提示した情報量が少ない分、必要な情報について考えることにつながったと評価した。また、ワールドカフェ方式については、音楽もあり、活発に楽しくワークができていたことや、昨年より主体的に参加できていたとの意見が聞かれた。改善点として、今後もワールドカフェ方式を取り入れるのであれば、グループメンバー各自が遠慮すること無く意見を書き込めるように、ホワイトボードでなく模造紙が良いことなどの提案があった。

### **2. 参加者による質問紙調査の結果**

研修会終了後に参加者を対象に質問紙調査を実施した。調査項目は、1. 「End-of-Life Care の充実」の視点で目標が達成できたか、2. 今後の看護実践に活かすことができるか、3. 講義とグループワークについての評価、4. 今後の要望やその他自由意見 の 4 項目で、1～3 については 5 段階の選択肢を提示し、自由意見を記載する欄を設けた。

参加者 25 名にアンケートを配布し 25 名から回答を得（回収率 100%）、そのうち同意が得られている 23 名について分析を行った。

#### **1) 研修会の参加目的が達成できたか**

参加目的の達成は、大変そう思う 15 名、ややそう思う 6 名、普通は 2 名であった。自由記述は 19 記述で、【アセスメントの重要性を学んだ】【多様な意見や新たな視点を知り、看護を考えることができた】【全体を見てケアすることが大切だと分かった】【患者・家族の思いを尊重した看護を再確認した】【看護を振り返る機会になった】【最期を看取るケアについて学んだ】であり、要望としてもう少し時間が欲しかった、薬剤使用に対するアセスメント方法を知れるとよかったなどの意見があった。自由記述の詳細を表 1 に示す。

表1 研修会の参加目的が達成できたか

(記述数19)

分類	記述内容
アセスメントの重要性を学んだ	事例検討を通してアセスメント、考えることの重要性を再確認することができた。
	情報からすぐにケアに結び付けるのではなく、どのようなアセスメントをし、判断をして、目標や具体的ケアを示しているのか、考えることが大切だと学ぶことができた。
	まずは病状のアセスメントからどのようなケアが必要であるかを考えることで、より深いケアを行うことができると思った。
	アセスメントを深めていくことで、EOLに対してのケアや考え方を改めて振り返って考え直すことができた。自分がアウトプットする方法について迷っていたところがあったが、迷いが軽くなったように思う。
	アセスメントは先入観を持たないことと、なぜという部分をいつも考えながら行動していきたい。
多様な意見や新たな視点を知り、看護を考えることができた	さまざまな考え方、ものの捉え方が共有でき、良い情報収集、共有する機会となった。
	ワールドカフェでやっていただいたので、いろいろな方の意見が聞けて本当に良かった。
	前回の研修では、生理機能や高齢者の特徴から患者の全体像を正しく把握するための知識を深めることができた。今回はグループワークを中心に、多様な視点から看護問題を捉え、ケアプランを立案することができた。自分になかった考え方や新しい考えを知ることができ、大きな学びとなった。
	グループワークを行うことで、様々な意見を聞くことができた。
	いろいろな人の意見を多く聞くことができて、自分の視点以外にも知ることができて学びにつながった。
	新しい視点や考え方もあり、とても学びが深まった。
全体を見てケアすることが大切だと分かった	グループワークを通して、様々な意見を聞くことができて知識を深めることができた。
	事例を通して、全体を見ながらケアをしていくことが大切と改めてわかった。
患者・家族の思いを尊重した看護を再確認した	残された時間、本人・ご家族がどのように過ごすか、どのように過ごしたいか。思いや生活を支えられる看護が提供できるような人間になりたいと思う。
	看護師目線の看護ではなく、患者さんや家族を中心とした看護を実践したい。
	その人が、今なぜそういう状況なのか、医学的な視点を考えた上で、本人・家族の思いを尊重した看護が必要であると再確認した。
看護を振り返る機会になった	忘れかけていたことを思い出せた部分もあり良かった。
	日々の看護の振り返りの良い機会になった。
最期を看取るケアについて学んだ	最期を看取るケアの方法など勉強になった。

## 2) 研修会は今後の看護に活かせるか

研修会の内容が今後の看護に活かせるかは、大変そう思う 19 名、ややそう思うは 2 名、普通は 2 名であった。自由記述は 21 で、【アセスメントの学びが看護の実践現場で活かせる】【研修会の学びを活かしていきたい】【多職種とアセスメントやケアについて検討できるとよい】【実践現場において思考することを大切にしたい】【事例検討が看護の振り返りになる】【根拠に基づいた看護を実践する】【利用者の思いを捉えてケアをしていきたい】【忘れていたことや自分の思考にないことを学べた】【多忙な実践現場でアセスメントの時間の確保が課題である】といった意見があった。自由記述の詳細を表 2 に示す。

表2 研修会は今後の看護に活かせるか

(記述数21)

分類	記述内容
アセスメントの学びが実践の現場で活かせる	アセスメントをするのは、日頃から苦手だった。この研修で少しでもアセスメントができると思う。グループワークの中で、ワールドカフェという研修がはじめてだったが、グループの意見を他のグループに持っていったりして楽しかった。
	現場でアセスメントの向上を伝達することができる。
	実際のケアで、今日学んだ視点から情報を集め、アセスメントしていきたい。
	老老介護、看取りを考えて関わる患者・家族の方も多いため、アセスメントやケアの視点も生かしていきたいと思う。
研修会での学びを活かしていきたい	食欲の低下だけでも様々なアセスメントができるため、入院患者に対しても様々な角度からケアのアプローチができると感じた。
	今後の看護活動に活かせるかととても思う。明日からまた頑張りたいと思った。そういった意味でも、この研修に参加できてよかった。
	私の勤務する病院でも、今回取り上げられたような症例に多く出会うため、活かしていこうと思う。
	施設でのケアには必要であるため、生かしていきたいと思う。
	カンファレンスや後輩への指導で少し自信を持って伝えられそうな気がする。
	今回学んだことを病棟に持ち帰り、他スタッフにも伝えていきたい。
多職種とアセスメントやケアの検討ができるとよい	現在、緩和ケアチームは部署内にあるが、外科病棟の一般床と同時で稼働しており、なかなか時間が取れない状態。少しでも今回の研修で得たものを病棟で伝達して、限られた時間も有意義に伝えるようにしたい。
	実際にアセスメント・ケアについて多職種で話し合えるとよいと思う。なかなか業務内で時間がなかったり、他部門との調整が困難であったりするが、検討が必要な事例においては、自分が主となって話し合いの席を準備する役割になりたい。
実践現場において思考することを大切にしたい	普段忙しすぎて、心に寄り添った看護ができていないと改めて思った。今できることを考えながら、多職種と共同した看護ケアについて考えていきたい。
	1つの症例で様々な方の意見があることを実感した。また本当なら 1 人 1 人の方に対して、頭をフルに使って今後も考え、話し合っていきたいと思う。
	今回参加し、「考え方」の重要さが分かった。最期のケアという点において、普段から行っていることだが、実際に書く・考えるという点で、もう少し看護・介護・家族、また他の職種ともその都度話し合い、苦痛のない、安楽で、本人も家族も、また介護・看護する側が納得できる支援をしていきたいと思った。
	定期的に思考プロセスの機会が必要だと思った。
事例検討が看護の振り返りになる	事例検討をすることは、日々の看護を振り返ることにもつながると考えた。このような研修に参加したいと思った。
根拠に基づいた看護を実践する	根拠に基づいた看護を行わなければいけないと改めて思った。
利用者の思いを捉えてケアをしていきたい	訪問看護の仕事なので、本人はもちろん家族への配慮も大切で、プランの中には、いつも思いを伺いながらケアをしていきたい。
忘れていたことや自身の思考にないことを学べた	自分が忘れていたこと、思いもなかったことを学べました。
多忙な実践現場でアセスメントの時間の確保が課題である	アセスメント、考えることの大切さを改めて感じたが、慌ただしい臨床の場で、どのようにその時間を確保していくかが課題だと感じた。

### 3) 講義とグループワークに関する評価

講義については、「関心がもてる内容だったかについては」大変そう思う 18 名、ややそう思う 4 名、普通 1 名であった。「スライドはわかりやすかったか」は、大変そう思う 17 名、ややそう思う 4 名、普通が 2 名、「実践現場の問題解決につながると思うか」では、大変そう思う 19 名、ややそう思う 3 名、普通 1 名であった。

グループワークについては、「事例のアセスメントを深めるうえで新たな視点を得ることができたか」は、大変そう思う 19 名、ややそう思う 4 名であった。「事例のアセスメントとケアプランに取り組めたか」は、大変そう思う 13 名、ややそう思う 8 名、普通 2 名、「実践現場の問題の解決につながると思うか」は、大変そう思う 18 名、ややそう思う 4 名、普通 1 名であった。

自由記述は 19 で、【ワールドカフェ方式を取り入れたことで多くの意見を聞くことができ良いワークができた】【他者の意見から気づきを得た】【多様な意見を得て看護の面白さを感じた】【多様な意見の大切さを学んだ】【ワールドカフェは意見も述べやすく楽しく学べた】【ワークの前に基本知識を共有する時間がもう少しあると良い】であった。自由記述の詳細を表 3 に示す。

表3 グループワークに関する意見

(記述数19)

分類	記述内容
ワールドカフェ方式を取り入れたことで多く意見を聞くことができ良いワークができた	ワールドカフェというグループワークで、グループの意見を持って行ったり、他のグループの意見が聞けてよくわかった。
	ワールドカフェは、いろいろな意見を聞くことができ、気付きも多かった。よいディスカッションができた。
	ワールドカフェという方法でのグループワークは初めてだったので、新たな視点を取り入れる上で、とても良いワークとなったと感じた。
	初めてのワールドカフェ方式でワークした。自分のグループ以外の意見もたくさん聞けて良かった。
	アセスメントを考えることに夢中になって、講義内容を忘れていた。ワールドカフェ方式で様々な意見が聞けて、学ぶことができ、今後活かすことができると思う。
	ワールドカフェ方式で多くのグループの人と意見交換する機会があり、考えも深めることができた。
他者の意見から気づきを得た	外の人の意見を聞くことで、自分の考え方も改めて見直すきっかけになりました。
	自分だけの視点ではなく、気づきが多かった。
	他者の意見を聞いて、ケアに取り入れて、さらなる質の高い看護を提供できると感じた。
	交流する貴重な場となり、考え方の視野が広がることにつながった。
多様な意見を得て看護の面白さを感じた	同じ事例に対しても違った考えや意見が出ることに、看護の面白さを感じた。
多様な意見の大切さを学んだ	看取り看護を実施しているため。多職種連携が必須です。色々な角度からの意見の大切さを再学習できた。
ワールドカフェは意見も述べやすく楽しく学べた	ワールドカフェ方式は、他の方と会話、意見が述べやすかった。
	ワールドカフェ方式の形式に初めて参加したが、刺激もあるし、楽しみながら学習できたためとても良いと思う。
	緊張感も少なく、色々な人と意見交換することができて良かった。
	初めてのワールドカフェ方式、色々な意見に出会えることができた。話しやすく良かった。
	ワールドカフェへの参加は初めてでしたが、新しい取り組みだと思った。
ワークの前に基本知識を共有する時間がもう少しあると良い	ワールドカフェ方式はたいへん面白い方法だ。楽しかった。
	グループワークに入るまでに、基本的な知識を共有する時間がもっとあるとよかった。

### 4) 今後の要望やその他自由意見

今後の要望やその他自由意見は 8 記述あり、がん患者の症状コントロールや精神ケアや在宅での EOL Care などの要望とともに、研修会の継続や多くの人に学んでほしいなどの意見も確認できた。また、ワールドカフェの移動が 3 回と決められており 1 つのグループとは意見交換できなかったのも、進行にもう少し柔軟性があってもよいとの意見があった。

## **VI. 評価及び今後の方向性**

### **1. 実践現場や看護職者に与えた影響**

今年度は、アセスメント力の強化を目標に講義とグループワークの 2 部構成で実施した。グループワークでは、参加者はケア対象者の心情を捉えてはいるが身体面のアセスメントの不十分であった、アセスメントとケアが結びつかない、ケアの根拠が明確でないという状況があった。しかし、グループワークを進める過程でアセスメントの重要性を再確認し、アセスメントについての学びの深まりを捉えることはできた。また、研修会後のアンケート調査から、参加者は今回の学びを実践の活動に活かせると評価していることから、研修会としては概ね目的を達成できたと評価する。さらに、今回ワールドカフェ方式を取り入れたが、ワークを通して多くの人と意見交換ができ、主体的な学びの場を提供するといった点で有効な方法であったと考える。

### **2. 本学の研究や教育活動に与えた影響等**

本年度の研修会の目的であるアセスメント力の強化は、講師である県内で活動するがん看護専門看護師が日頃の看護実践現場で捉えている課題をもとに決定した。研修会に向けた講師と教員との検討会でも語られたように、看護実践の現場では日々の多忙さ等を背景に、まず行動することが求められ、対象のニーズを十分捉えることや的確にアセスメントすることが難しい状況が生じている。このように十分に思考することが難しい状況は、今回のグループワークの過程でも確認できている。本研修会の参加者は ELNEC-J に参加し、かつ本研修会に自主的に参加を希望した看護師であり、看護に対する意識が高く、各施設の看護の改善や充実にも影響を与えることが期待できると推察する。上述した看護実践現場の課題は年 1 回の研修会で解決されるものではないが、本研修会を継続して実施することは、県内の EOL Care の充実に寄与すると考える。また、本研修会は県内で活動するがん看護専門看護師と協働して実施している点で、専門看護師の思考や活動を知る機会にもなっている。これは、本学の大学院専門看護師コースの教育内容を検討する上で貴重な機会であり、教育の充実にもつながっている。

### **3. 今後の課題及び発展の方向性**

本研修会は、共同研究の取り組みを含めて今年度で通算 3 回目となり、毎回前年度の評価を参考に改善と充実を重ねてきた。専門看護師と確認した看護実践現場の現状や研修会修了後のアンケートの結果から研修会のニーズを確認していることから、今後も内容の充実を図りながら継続していくことが必要であると考ええる。